

令和7年度第1回兵庫県立図書館協議会 会議録

1 日時及び場所

令和7年10月23日（木） 13:30～15:30

2 出席者

協議会委員 石橋委員 太田委員 角本委員 木村委員
中山委員 橋本委員 藤井委員 安田委員 森委員

教委事務局 社会教育課 山本課長 谷本主任指導主事

県立図書館 野村館長 井上次長
櫻井館長補佐兼総務課長 簗本利用サービス課長 前川ふるさと・資料課長

3 議事

(1) 県立図書館運営状況について

次長より、「県立図書館の運営状況」（資料1）、館長補佐より「中期運営方針の自己評価（令和6年度）」（資料2）に基づいて説明。

（委員） ケアonzの図書館に視察に行く機会があった。開放的な雰囲気の中で明るいイメージだった。小説の背表紙にはハートマークやホームズの帽子や虫眼鏡、ペガサスなどのシールが貼ってあり、中身を見なくても内容がイメージできるような仕掛けがしてあった。他にもヨガ、ダンス、歌、STEAM（科学、工学、数学）など、州がイニシアティブをとり、多様な年齢層へのイベントを実施している。各イベントはドロップイン方式をとっており、気軽に参加しやすく、利用者同士が交流できる雰囲気だった。

（委員） 図書館は静かで、調べものをする場といった位置づけだったが、現代の図書館には癒し、賑わい、交流といったいろいろな役割が附随するようになっている。昔のイメージや考え方だけでは利用者は増えない。様々な観点で工夫をしていけば、より良くなると思う。

（委員） 図書館の役割が進化しており、幅広い年齢層の方が継続的に、自発的に生涯学習を行う場であることが位置付けられていると考える。県立図書館はSNSの発信にも力を入れられており、県民に広く周知され、全国的にも注目されるような取り組みが期待される。

（委員） 大学附属図書館の全国協議会に出席した際、大学図書館の質や機能が変わってきているという話が出た。大学の場合は、学び方を変えるためにアクティブラーニングやラーニングコモンズを導入している。学生同士の交流や、共同で課題に取り組むスペースを設けることが大きな取り組みとなっており、本を借りて読むだけではなく、人と人との繋がりをつくることが狙いとなっている。県立図書館と大学附属図書館の機能は異なるが、県民が知的な財産にアクセスするためのツールであるため、利用を促進するために何をするかが課題である。図書館の活用方法を、図書館職員のみが考えるのではなく、本を活用するイベントなどを通して、県民とともに考えることで新たな繋がりや活用方法が見えてくるのではないと思う。

（委員） 時代の流れに伴い、これからの図書館も変わっていくことが予想される。どのように変化していくのか、中長期的なビジョンを持たなければ気が付かないうちに時代に取り残されることもあるだろう。県立図書館としては、今後20年どうしていくのか、ビジョンをお持ちだろうか。

（図書館） 現在のところ、長期のビジョンは持ち合わせていない。現状5年ごとに中期運営方針を定めて計画を立てている。図書館が社会的にどのような役割を果たすように変わっていくのかは、県教育委員会や県全体で社会教育をどのように進めていくのかが決まらな方向を定められないと思っている。図書館の在り方は変わっているので、県全体の課題として認識しているが、具体的な計画を示すことはできない。

（委員） 最近はAIが非常に便利になっていて、ウェブOPACを用いて検索してくれる。例えば「県立図書館が所蔵する〇〇に関する本をOPACで探して」と指示すると、AIが検索して結果を提示してくれる。時代の流れとして、図書館業務にAIを取り入れない手はないと思う。予算の限界もあると思うが、AIを使ったオンラインでのレファレンスサー

ビスや、図書の検索など、図書館業務にA Iを取り入れることは検討されているのだろうか。

(図 書 館) 例えば沖縄県立図書館は蔵書探索A I というシステムを取り入れている。予算の見込みが立つようなら、次のシステム更新の際に取り入れられるように考えたい。

(委 員) システムを取り入れるなら更新時期になるかと思うが、利用者側のリテラシーの在り方が変わっており、大学生でもO P A Cを使いこなせなくなる状況が近づいている。O P A Cのインターフェースも変えていかないといけないという実感を持っている。

(委 員) 専門職員の採用状況はどのような状況か。大学図書館の専門職員の採用状況は非常に厳しい状況である。県立図書館は行政職員と専門職員の両方がいらっしゃると思うが、県で採用された方が長期間図書館で勤務し続けることや、市町立図書館や大学図書館との人事交流はあり得るのだろうか。専門職員の人材育成が課題になっているのでお聞きしたい。

(図 書 館) 専門職員の採用は実施していない。司書職の採用試験は無く、行政職員として採用された者のなかで司書資格を持っている者が図書館に配属となることもあるが、司書資格を持っていても図書館勤務にならない者もいる。図書館で勤務している者も、数年で人事異動があるため、司書資格を持たない職員が研修を受講することで技能を向上させて実際にレファレンス業務にあたっている。

(委 員) 研修の受講やO J Tのなかで専門性を高める対応で、継続的な専門性の向上は難しい状況が伺えた。

(委 員) 変わりゆく図書館ということで意見が出ているが、県立図書館でも数年前に、同様の議論が行われていたように思う。例えば飲食可能なスペースや会話ができる談話室の設置、また、グループ学習に対応するために閲覧室2の机を移動が可能なものに変更するなどの取り組みが行われた。閲覧室2については、一般利用者への配慮から利用が控えられているのか、現時点では利用が少ない印象を受ける。しかし、すでにグループ学習が可能な環境は整備されており、活用の余地は十分にあると考える。例えば校外学習等で図書館を利用する際には、扉を閉めて利用するなど、利用方法を工夫することで、より多様な使い方が可能になると考える。限られた施設のキャパシティの中で、新しいニーズすべてに対応は難しいが、今後は閲覧室2の活用方法について検討を重ねることで、学習活動への利用をさらに促進できるのではないかと考える。

(図 書 館) 閲覧室2について、環境を整えたものの頻繁には活用されていないのが実情である。県立図書館の蔵書は専門性が高く、高校生の学習内容に比べて、ややハードルが高いと感じられる。レファレンス機能と組み合わせることで、社会人によるグループ学習の場としての活用も期待できるのではないかと考えている。そうした新たな使い方が実現できるよう、どのような工夫や環境整備が必要か、今後検討していきたいと思う。

(委 員) 9月30日に新たに垂水図書館が開館した。子育て世帯の方々から、図書館に来館しづらいというご苦勞の声を伺っていたこともあり、誰もが利用しやすい図書館を目指して、フロアごとに異なる雰囲気を持たせた空間づくりを行っている。具体的には、子育て世帯が自由に読み聞かせを楽しめるフロアや、セミナー室を備えたフロア、会話をしながらゆったりと本を読めるフロアなどを設けている。これにより、従来の「静かな図書館」から、利用者同士のコミュニケーションが生まれるような新しい図書館のあり方へと変化していくことが、今後の方向性であると考えている。

(委 員) 現在では図書館を利用しなくてもA Iを活用して必要な情報を検索し、提示された書籍を購入して調べ学習を行うことが可能となっている。しかし、図書館では司書が本の内容等を説明するため、A Iよりも多くの情報を得られる。また、A Iを利用する際は自分自身が必要な情報を明確にし、的確なキーワードを入力する必要があるが、レファレンスでは職員が対話を通じて必要な情報を引き出し、適切な資料や情報を提案することができる。こうした人と人とのやり取りを通じて、より適切な資料選びが可能となる。A Iが提供する情報は必ずしも正確とは限らないため、現時点ではレファレンスとA Iの活用方法は異なるものであり、それぞれの特性を理解した上で使い分けることが重要であると考えている。

(委 員) アウトリーチ活動については、どれも拡充されており素晴らしいと感じた。

(委 員) 新しく建てられた図書館は、時代に合った新しいコンセプトに基づいた設計ができるため利用者を呼び込みやすい点で有利である。県立図書館はそうではないが、開館から50年の歴史は新しい図書館にはない大きな利点である。その利点を上手に生かしたい。建物の構造は変えられないが、新しい役割に合わせて活用することは絶対にできると思う。

- (委員) 各指標の数値を見ると、どの項目も素晴らしいと感じた。今後はいかにＡＩを活用していくかが課題になるかと思う。
- (委員) インスタグラムは毎日のように更新され、普段から楽しく利用させていただいている。幅広い年齢層向けに多種多様な講座を実施されており、大変興味深い講座も多くある。講座の種類が重複していない点も魅力的である。明石公園を散歩していたら、図書館までの案内図にＳＮＳのＱＲコードが掲示されているのを見かけた。視覚的にも分かりやすく、工夫されていると感じた。公園の雰囲気と合わせて、外にベンチや花壇、くつろげるスペースができれば、外で本を読める憩いの場所として一日中過ごせそうだと思う。
- (図書館) 公園の雰囲気を活かすことについては今までも意見をいただいております、令和９年度に予定されている旧明石市立図書館跡地のリニューアルオープンに合わせて、明石市と連携しながら進めていきたいと考えている。
- (委員) 委員の提案や意見に対して、実現可能なことについては迅速に対応していただき、不可能なことについては明確に提示していただけるから安心して提案できる。感謝したい。
- (委員) ＡＩを活用した業務はあるか。
- (図書館) 今のところない。
- (委員) 文章を書く仕事をしているので提案だが、例えば展示のアイデア出しや書評など、添削等を行う必要はあるが、ＡＩに任せられる業務は任せてみると、業務効率化に繋がり職員が楽になるだろうと思う。よければ取り入れてみてほしい。
- (委員) 電子書籍の登録者数について、令和７年７月末現在の小中高等学校はどのくらいの割合で登録しているのか。
- (図書館) 高等学校が４４校、中学校が９校、小学校が４０校、特別支援学校・その他が１９校である。
- (委員) 予想外に小学校の利用が多い。高等学校が多いのかと思っていた。
- (委員) デジタル化の推進について、デジタル化の入口はホームページのトップページであると考えて。トップページを「玄関口」として、まずは視覚的に魅力的な玄関づくりに力を入れてほしい。例えば岐阜県立図書館や石川県立図書館は、建物が新しくリアルでも面白いし、ホームページも非常に魅力的である。一方で県内の市町立図書館は、どの図書館も使いやすいと整理されたホームページになっているが、デザインが似通っており、各図書館の個性や魅力が伝わりにくく感じる。動画や写真の使い方、行事の見せ方に工夫が必要であり、文字情報だけで伝えようとするのではなく、トップページに訪れた時点で視覚的に図書館の魅力が伝わるような設計が望ましい。参考として、国立国会図書館のデジタルコレクションでは、文字情報ではなく、デジタル化された画像をカタログのように並べて視覚的にアプローチしている。これにより、興味が無くてもホームページを開いたついでに閲覧してもらえる可能性が高まり、より効果的な魅力発信につながると考える。
- (図書館) 職員の手で可能な限りやっていきたいと思う。
- (委員) 職員の能力では限界があり、専門的な技術が必要だと考える。コンセプトを固めたうえで予算を割いて委託することも良いと思う。
- (委員) これまで自社ホームページを自作していたが、委託に変更したところ仕事の受注が３倍以上に増加した。掲載内容は自作時と変わらないにもかかわらず、視覚的なアプローチによって認識が大きく変わることを実感した。この経緯からも、ホームページのトップページの魅力づくりを検討していただきたい。
- (委員) 県内市町立図書館のホームページも職員が運用していると思われるので、委託することで他の図書館と差を付けられるチャンスと考える。
- (委員) 市町立図書館職員との繋がりを密に持つことが重要だと考える。県立図書館が開催する研修等を活用し、市町立図書館を通じてその利用者に向けて、県立図書館のインターネット貸出予約や遠隔地返却等のＰＲを依頼することで、より広く周知・利用促進が図れるのではないかと考える。
- (委員) 県立図書館は魅力的な講座等をされており、他にも素敵な取り組みをされている。新しい図書館が持っていない、県立図書館の魅力を今と違う形で発信できることを模索してほしい。
- (委員) 文字だけでなく画像を活用して視覚的にアプローチすることは重要であると考えて。神戸市立図書館もインスタグラムでの発信を始めた。また、地元神戸にゆかりのある有名な方を招き、本を紹介するイベントや、カフェの経営者に本を紹介してもらうイベントを行

っている。かつては図書館があるから書店では本が売れないという話もあったが、現在では図書館と書店が共同で本を読む人を増やそうという取り組みをしている。イベントの告知や書籍の紹介に留まらず、SNSを駆使して読書の推進をしていきたいと考えている。

(委員) 書店ではPOPを作成して展示している。例えば京都の有名な書店では、通常分野別に並べる方法ではなく、本と本の繋がりを意識し、この本を読む人はその隣にある本も買いたくなるような工夫をしている。県立図書館には宝物がたくさんあるので、例えば関連している4冊の本を並べ、軽くコメントを入れた写真をSNSに掲載することで、面白い繋がりが出てくるかもしれない。その投稿が増えると、過去の投稿を遡るだけでも楽しんでもらうことができ、県立図書館の利用が増えると考え。県立図書館の職員だけで運用することが難しければ、市町立図書館と情報共有することで、お互いがお互いの蔵書をPRすることも可能であり、インターネット貸出予約等の利用の増加にも繋がるのではないかと思う。いままでとはアプローチを変えて、たくさんの人にアピールする機会になると考える。

(委員) POPがあれば目立つことに加え、本の内容がわかりやすくなる。無料で使えるデザインツール等も活用し、普段県立図書館を利用しない方も講座等をきっかけに存在を知ってもらうことで、利用者増につながってほしい。

(委員) 自己評価の計画数の決め方について、電子書籍の利用が始まって3年目となり、電子書籍の利用が増加すると来館者数やインターネット予約数に影響することもあるだろう。昨年度の実績を超えることを目標に努力されている点は評価できるが、状況を総合的に判断したうえで計画数を設定することで、計画達成の負担が軽減される可能性があると考え。

(委員) 電子書籍の利用者情報の一括登録等について、非常に良い取り組みだと思う。また、市町立図書館職員の資質向上支援について、研修受講生アンケート結果の満足度が非常に高い点が素晴らしい。研修内容に工夫があることがうかがえる。非来館型の参加しやすい学習機会の提供について、講座のオンライン配信を、リアルタイム配信と録画配信のどちらにせよ、講師の了承が得られる講座に限定しつつも、可能な限り増やしてほしい。来館が難しい方への支援となり、結果的に県立図書館への関心や来館者の増加に繋がるのではないかと考える。アウトリーチ事業について、参加者数等が増加しており、努力されていることが伝わってくる。今後は小中学校の参加者数等のさらなる増加も期待したい。情報発信について、基本的にはホームページの改善と、ケーブルテレビや新聞をさらに活用してほしい。新聞等への掲載数は増加しているが、協議会委員に神戸新聞の記者の方もいらっしやるので、地元新聞との連携も強化しながら、県立図書館の存在意義や利用価値を上げるためにも、より積極的な広報活動に取り組んでほしい。

(図書館) 貴重な意見をいただきありがとうございました。率直なところ、建物自体に物理的な制約があり、予算の制約もある。大きく変えることは難しいところがあるが、いただいた意見のなかで、情報発信等、工夫できることを進めていきたい。

(委員) 市町立図書館等の職員の方に県立図書館のツアーに参加していただき、改善できる意見もらって、取り入れるのも良いかと思う。